

サハリンに白鳥訪ねて

八 木 博

ハクチョウの旅立ちを追って北海道まで行きましたが、それから先の事は分かりませんでした。もし、機会があればハクチョウ達の繁殖地までと思っておりました。

永年の念願が叶って、今年5月、サハリンに渡り、ハクチョウ達と出会いましたが、福島から4,000kmの半分、2,000km位まで行って来ました。

5月1日から小樽よりサハリンに向けて定期便が就航することになり、幸運にもその処女航海で向かうことになりました。午前11時、小樽の「日、ロ定期航路フェリーターミナル」では記念式典が行われ、小樽の消防音楽隊の演奏に送られ日本を離れました。

日本白鳥の会の松井 繁会長さん、団長に帯広畜産大学の藤巻裕蔵教授ご夫妻で23名の会員、青い海の中サハリンに向かいました。船中で1泊しましたが、国境を越えてロシアに入った直後に、時差の関係で2時間もプラスされたのには驚きました。翌2日の午前7時にはコルサコフ（大泊）港に着きました。その日は貸し切りバスでトナイチャ湖へ。ここでは岸から1km先ぐらいに12羽のオオハクチョウを見ることが出来ました。実はこれがサハリンでも最も近くで見たハクチョウだったのかも知れません。

5月1日から狩漁が10日間解禁になって、カモ、ガンが対象でハクチョウは保護鳥扱いになりますが、広大な土地、お国柄その辺は定かではありません。でもハクチョウの飛来コースの中には、休息地として保護されている湖水もあって、規則は守られておりました。

日本ではハクチョウは、殆ど目の前で見られますが、サハリンでは遥か彼方に何千羽単位で、オオハクカコハクかは、プロミナーでも確認出来ない程の距離で人が近付くと、何処の休息地でも直ぐに逃げてしまいます。レーニングランドからポタポフ鳥学博士が、福島の阿武隈川のハクチョウを訪ねた時に、身近かに接して驚いた事を思い出しました。またポタポフ博士の息子さんがチャウ湾でハクチョウに首輪の標識を付ける仕事をしていることを話していましたが、022Cの標識のハクチョウには、その日は再会は出来ませんでした。

ハクチョウたちも国境を越えサハリンに着くと同時に切り替えて、人間からは離れて日本の様に目の前で見るとは全くありません。

サハリンでの案内は、一昨年美唄の研修会に招待した狩猟局のドリコフ・アンドーレ・イワノビッチさんで、日本語通訳は現地から女性のマリーナさんです。アインスコエ湖からはライフル銃を持ったハンターが、同行しました。ヒグマでも出たら大変です。お陰で安心してハクチョウを訪ねる事が出来、この付近にはトナカイも生息しているそうです。好物の苔類が一面にありました。ハクチョウの飛来コースについてホテルで1時間ほど大きな地図で説明して戴きました。オオハクチョウ、コハクチョウたちはサハリンの東海岸、中央、西海岸の3コースを渡って行くがその日の風次第で

コースも変わります。最近地震のあった西側の海岸にはオオハクチョウの20のつがいが繁殖を確認されています。

休息地を各地訪ねましたが、どこの休息地も対岸が見えない程広い所が多く、氷が張っている湖面、周りが解けかけた湖水等が見られて、近くには、高い山々があつて渡りの目印になっているのか、日本の飛来地の様な場所が目につきました。

最後に訪ねた休息地から、2,000kmも離れた繁殖地に飛んで行くコハクチョウたちも、優雅の中にも自然の厳しさに感動しました。福島を目指してくるハクチョウたちに、これまで以上の愛情をかけてやりたいと思っております。

サハリンの街では日本車が多く、看板を消さないで乗っているので日本の街なのかと錯覚しました。きれいな川などはなく、飲み水は日本と違って何処でも飲むことが出来ないのには、苦労しました。伊豆沼から親子で参加された笠原の息子さんには、5日の子供の日をお祝いして人形が贈られ、陸奥市から参加の気仙さんと私が5月8日が誕生日にあたるので、サハリンのアリーサさんから2人に焼物セットを記念に贈られ、また谷口さんと私はサハリンの画家ユーリーさんから、アインスコエ湖で肖像画を描いて戴き、谷口さんと記念に戴きました。60歳の思わぬ誕生日の贈り物でした。滞在期間中は天気恵まれて、松井会長さんも皆様の精進の賜物と喜ばれて、静かな海を航海し数々のハクチョウの生態を知り、無事に稚内に着きました。